

国立国会図書館所蔵横山由清旧蔵書について

大 沼 宜 規

当館古典籍課に架蔵されている「800 函」（函番号 800～899 が付与されたもの）と呼ばれる資料群は、「明治以前の和装書・記録類のコレクションで、幕府引継書類、円光寺本、宗家記録等準貴重書資料群」とされ、特殊なコレクションが含まれたものである¹。上に挙げられたコレクションのほか、小宮山叢書（小宮山楓軒・南梁旧蔵本）、西村茂樹旧蔵本、茶道叢書（今泉雄作旧蔵本）、冑山文庫（根岸武香旧蔵資料）など、個人文庫が含まれていることも特徴のひとつとして挙げることができる。

上記の個人文庫は、いずれも『国立国会図書館百科』等によって紹介され、目録も作成されていて、よく知られた文庫ということが出来る。だが、本誌 59 号で紹介した小杉文庫のように、コレクションとして名は通っていたが、一覧して把握することが実際には難しかったものもある²。さらに、小規模であるためか、従来、コレクションとして紹介はされて来なかったものの、いわゆる名家手沢本として、収集当時の担当者がコレクション性を意識し、まとめて購入したと考えられる資料群もある³。本稿で紹介する横山由清旧蔵書（以下「横山本」と略す）も、そうした資料群のひとつで、「830 函」に納められている。横山本の中には、自筆本や書入本など旧蔵者の学問活動を窺わせるものも、まま含まれていることに加え、明治期にかかるため『国書総目録』で把握しきれないものもあり、今回ひとまとまりとして紹介するものである。

横山由清と旧蔵書

今回取り上げる資料群の旧蔵者横山由清は、江戸後期から明治初期にかけての国学者、歌人である⁴。通称は保三。月舎と号した。文政 9 年（1826）に塚越敬明の子として江戸に生まれた。生母大村氏は和歌に秀で、由清も 4

歳で字を識ったという。その後、歌人横山桂子⁵の養子となり、桂子および井上文雄に和歌を、本間游清、伊能穎則に国学を学んだ。伊能門は、小中村清矩、木村正辞等、明治以降にも活躍する国学者を輩出したが、横山もその一人で、小中村や木村とともに、江戸時代末には和学講談所の教授となっている。一方で、安政4年(1857)には『ロビンソン・クルーソー』の初期の邦訳(オランダ語からの重訳)『魯敏遜漂行紀略』や、動詞に関する語学書『活語自他捷覧』なども刊行していた。

明治維新後は、大学中助教、制度局御用係、元老院少書記官などを歴任、木村正辞とともに『語彙』の編纂、黒川真頼とともに『旧典類纂』の編纂などに関与した。特に、法律制度の調査・整備に力を尽くし、『旧典類纂皇位継承篇』『旧典類纂田制篇』『旧典類纂纂輯御系図』『食貨志略』『田制私攷』『日本上古売買起原及貨幣度量権衡考』『尚古凶録』等の編著を残した。歌人としても優れ、生涯に数千首の歌を詠んだという⁶。明治12年(1879)2月に54歳で没。遺詠のうち358首は黒川真頼によって『月舎集』(明治14年、横山誦吉刊)にまとめられた。主要な考証論説も、後に幸田成友によって『日本田制史』⁷に編集され、その業績を俯瞰することができる。

横山由清の蔵書については、まとまった蔵書目録を確認できないこともあって、その全体像は不明である。だが、元老院にともにあった細川澗次郎は、横山の墓碑に「長じては群書を博究し、旁ら漢洋の書に及ぶ。暇あれば則ち一編を手にして寒暑も輟めず、多く古籍を購い、又人に善本を借りて、手づから之を鈔し、或いは旧本を聚めて、互いに鈎稽を参じ、朱墨にて塗抹す⁸」と記している。文献考証学者らしく、書籍を収集し、校合を加えていたようである⁹。

では、それらの横山本は、現在どうなっているのだろうか。これもまた、手がかりに乏しいが、幸田成友は、「歿後御遺族の手によつて悉く保存せられた所、大正四年佐佐木信綱氏が同家と深き縁故あるによつて悉皆引請けられたとし、その一部は整理(処分)し、一部は東京大学法学部に寄託されたと記している¹⁰。佐佐木信綱自身も次のように述べている¹¹。



横山由清肖像 『日本田制史』
(大岡山書店、1926)による

翁はわが先人と学問上の交りあり。翁の後なりし碩君は竹柏園の同人たりしかば、さる因みもて翁の蔵書及著者の草案等数百部を譲らるゝを得て、わが竹柏園に蔵することとなりぬ。そが中より法制に関するものを選び、かつて大学にて翁の教を受けられし宮崎教授(宮崎道三郎)にはかり、ここに百五十部を法制史研究室に寄託することをなすつ。

佐佐木信綱に伝わった数百部の資料のうち、150部が、東京帝国大学法学部に寄託されていた。だが、幸田成友は、それらの資料について「東京帝国大学に寄託せられた法制史関係の遺稿及び材料は、(中略)大震災は是等を挙げて灰燼とした」と述べている。

一方、法制史関連以外の竹柏園本は、『竹柏園蔵書志』に少なくとも93点が確認できる¹²。そして、それらの資料の多数は、同目録に確認できない本を含めて、現在天理図書館に『横山由清雜稿』約100点などとして収蔵されている¹³。同叢書には横山由清の自筆稿本や書入本が多数含まれ、量だけではなく質的にも優れたものと考えられる。だが、これを除けばまとまった所蔵は確認できない。ころみに、蔵書印等によって旧蔵者が分かる目録等を確認すると、少なくとも大東急記念文庫に10点¹⁴、東京国立博物館に16点¹⁵、宮内庁書陵部に4点¹⁶、筑波大学附属図書館に6点¹⁷が横山本と判明する。さらに、国文学研究資料館所蔵の「墨田川扇合」¹⁸のように近年収集された資料などもある。

各図書館等の資料は、前述の幸田の指摘によれば佐佐木信綱が処分した資料となるが、それ以前に横山本が流出している形跡もあり¹⁹、流出の経緯は未詳であるが、分蔵されている状況を考えて、横山本は広く散逸したのと考えてもよいだろう。

当館所蔵の横山本

当館は、大正4年7月20日に古書肆から購入した27点の横山本を所蔵している。前述の幸田は、このうちの『食貨志略』について、大正4年に佐佐木信綱が処分したものの一つと推測しているが、いずれも同日に購入されていることを考えれば、27点すべてそのように考えてもよい。これらが、当館所蔵の横山本の中核となる。また、それとは異なる経緯で収集された資料も少なくとも6点所蔵している。

横山本の全体像が知られないため、当館所蔵本の位置付けもまた把握できないが、天理図書館以外にまとまった所蔵機関がみられないなかで、33

点の資料は、決して少ないものとはいえないであろう。また、他の所蔵機関に架蔵される資料との比較検討は今後の課題となるが、当館所蔵本のなかにも、稿本、書入本類などの特徴ある資料も含まれている。その一端を紹介しておきたい。

まず、古典籍に校合註等を加えた書入本がみられる。たとえば、『倭名類聚抄』は、代赭で清水浜臣本、墨で小山田与清本をもとに間宮永好が校合した内容を移写し、藍で間宮永好、伊能穎則や由清自身の考察を書き込んでいる。このほか、同様に文久三年（1863）に細井貞雄校合本、田中道磨校合本と対校した『宇津保物語』、山崎知雄校合本の校合内容を移写して検討を加えた『続日本後紀』、丹鶴叢書本と校合した『志乃比祢物語（忍音物語）』なども所蔵する。他の学者の所蔵本を転写したことを示す奥書がみられるものもある。たとえば、『播磨風土記』中に収載されている「新抄格勅符」は、醍醐寺報恩院本から、彰考館、栗田寛、小中村清矩、木村正辞と転写を重ねて伝わった本を、由清が謄写させたものである。同書所収の「日本感霊録」もまた、長沢伴雄、伴信友を経て、黒川春村が謄写した本を横山由清が転写したものである²⁰。

また、横山桂子、由清母子の歌文に関する活動の記録もみられる。たとえば、『文章会』は、横山桂子、由清母子が参加していた安政期の井上文雄社中による文章の会の記録などから成るもので、井上文雄、間宮永好、久米八十子、清水光房、山田常典など、当時の文人の名が連なる。また、『はつ春の日記』は、横山桂子による歌日記である。天保15年から嘉永5年までのうち、嘉永3年を除く8年間の正月の日記をまとめたものである。横山桂子による文政12年の旅日記『露の朝顔』も所蔵している。いずれも稿本で他館の所蔵を確認できない。

そのほか、「大学」罫紙を使用して作成された『居所名日記』、「元老院」罫紙を使用して作成された『食貨志略』など、官省での活動のなかで作成されたと思しき資料を所蔵することも興味深い。また、先に挙げた横山由清自筆校本類のほか、『古物語名寄類韻』『習静日抄』といった横山由清の自筆稿本や、『八王子名勝志』（百枝翁著）の稿本などもみられる。

以上のように、当館所蔵の横山本にも、文献考証に力を尽くした国学者・和学者、歌人あるいは明治時代の法制官僚として活躍した横山の多様な活動を示す資料が残されている。

本稿では、当館所蔵本の中核にあたる830函に収められた横山本の目録

を作成するとともに、それ以外についても管見の範囲で紹介していくこととする。その際、横山や横山の同時代人の活動を知るよすがとなる奥書・識語等については、なるべく記録していくこととした。横山由清研究の一助となれば幸いである。

なお、当館では、大沢清臣旧蔵書、小中村清矩旧蔵書など今回紹介する横山本同様の性格を持つ小規模なコレクションを所蔵する。それらについても、今後随時紹介をしていきたいと考えている。

注記

- 1 国立国会図書館百科編集委員会編『国立国会図書館百科』（出版ニュース社、1988）79頁。
- 2 拙稿「国立国会図書館所蔵小杉文庫について」（『参考書誌研究』59号、2003）。
- 3 事務用の図書原簿や目録に「〇〇本」等と記される。
- 4 横山由清伝については『国史大辞典』14巻（吉川弘文館、1993）の鈴木淳氏執筆「横山由清」の項、細川潤次郎撰「故元老院権少書記官横山由清墓」（『日本田制史』大岡山書店、1926所収）、石山洋〔ほか〕編『江戸文人辞典』（東京堂出版、1996）、当館編『人と蔵書と蔵書印』「横山由清」（朝倉治彦氏執筆）などを参照した。また、阪本是丸「塙先生と明治の国学」（『温故叢誌』42、1988）、藤田大誠「明治期国学者横山由清に関する覚書—その学問と教育」（『神道宗教』187、2002）、同「横山由清と明治国家形成—国学者と法制官僚の間—」（『神道研究集録』17、2003）などの論文もある。
- 5 横山桂子は寛政11年（1799）生。大村成富の娘。江戸深川に生れ伊予吉田藩主伊達村芳夫人の侍女となる。文政3年（1820）結婚。吉田藩江戸詰典医本間游清に和歌を学ぶ。天保2年（1831）題詠歌が仁孝天皇に認められ「桂子」の名を賜り散位の女官に叙せられた。号は桂子、月の屋、月舎。安政2年（1855）57歳で没（『国書人名辞典』4（岩波書店、1998）による）。
- 6 『月舎集』（1881、横山謙吉刊）の細川潤次郎序、横山謙吉跋による。
- 7 『日本田制史』（大岡山書店、1926、1981年五月書房より復刻）。同書は、「食貨志略」「田制私考」のほか「附録」として「刑法志略」「日本貴族沿革論」「日本上古売買起原及貨幣度量権衡考」「日本人種論並良賤の別」「古代陶器考」「本朝古来戸口考」「婚礼通考」を掲載する。
- 8 細川潤次郎撰「故元老院権少書記官横山由清墓」（前掲注4『日本田制史』所収）による。原漢文。

- 9 横山の書籍収集については、琳琅閣主人斎藤兼蔵（二代）が、初代が「横山由清さんにもよく本を売りました」などと述べていることから裏付けられる（反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、1990、129頁）。
- 10 「横山先生に就いて」（大正15年著、前掲注4『日本田制史』所収）。
- 11 「横山由清稿本并手沢本目録」（大正4年9月編。前掲注4『日本田制史』所収）の前書部分による。なお同書は東京帝国大学法学部に寄託された資料の目録。
- 12 佐佐木信綱編『竹柏園蔵書志』（臨川書店、1988）によれば、『国学の説』『月舎学則』『続日本紀』『続紀目安』『文徳実録』『三代実録』『岩倉殿御返翰草稿』『公議論』『古語拾遺』『神皇正統記』『桜雲記』『奥羽永慶軍記』『逸号年表』『万葉集元暦校本摸本』『万葉集略解』『万葉集私考』『古歌類聚』『続詞花和歌集』『月詣和歌集』『月詣和歌集補』『類聚歌苑卷第十三』『玉廼美須末流』『類題麗玉集』『蛛のいかき』『女房和歌抄』『小町集等』『猿丸太夫集』『素性集』『師輔公集』『師輔公集等』『朝忠集』『清慎公集』『信明集』『大中臣能宣朝臣集等』『海人手古良集』『源順集』『賀茂保憲女集』『藤原高光集等』『匡衡集』『御堂閔白集』『伊勢大輔集等』『赤染衛門集』『和泉式部集考証』『藤原経衡集』『経信集』『大納言経信卿集』『散木奔歌集』『平忠盛集』『寂蓮集』『かつらのえだ』『三十六人集』『歌仙家集補』『新撰六帖索引』『和歌分類』『道のさきはひ』『現存三十六人詩歌』『うつは物語目安』『源語秘訣』『源氏物語年立』『日本国現報善悪霊異記』『宇治拾遺物語』『更科の日記』『助辞本義一覽』『言語の説』『発語考』『古言海』『古訓類纂』『大和琴』『語例』『昼語考』『皇朝喩林』『譬喩部類』『語林類葉』『古事部類抄』『梵唐千字文』『枕詞略註』『類聚雜要抄』『弘安礼節』『本朝皇胤紹運録』『齋宮記等』『菅原氏系図』『全浙兵制日本風土記』『日本古印譜』『天平宝字年間物価表』『あつし考』『月の雫』『書見次記』『月舎雜筆』『多満波々幾』『最勝王経音義』『釈家雜記』『桑原村主安万呂書』が注記により横山本と確認できる。
- 13 『国史大辞典』『日本古典籍書誌学辞典』なども、同叢書を紹介している。『天理図書館稀書目録』第2冊（1951）には、そのうち『赤染衛門集』『朝忠集』『海士手古良集』『右大臣師輔集』『うつは物語目安』『桜雲記』『歌仙集補』『賀茂保憲女集』『唐錦八写絵』『紀記歌集』『蛛のいかき』『群書類従二百五十』『群書類従二百七十八』『群書類従三百五十』『現存卅六人詩歌』『古歌類聚』『国学の説』『古語拾遺』『猿丸太夫集』『寂蓮集』『掌中源氏物語年立』『続紀目安』『新撰六帖索引』『信明集』『素性集』『清慎公集』『大納言経信卿集』『平忠盛集』『月の雫』『月舎雜筆』『経衡集』『登蓮法師集』『匡衡集』『御堂閔白集』『源順集』『類聚歌苑卷第十三』総計36冊分の解題目録が掲載されている。

る。さらに、天理図書館備付のカード目録により『宇治拾遺物語』『惠慶法師集』『月詣和歌集』『古今集遠鏡』『和歌分類』『助辞本義一覧』『史籍年表』『神皇正統紀』『文徳実録』『枕草子春曙抄』『月の雫』（4～6）『花たちはな』『譬喩部類』『月舎雑筆』『北史国語考』『古言海』『続古事談』『玉勝間類字』『語例』『豊語考』『宝物集抄』『松嶋日記』『読竹取物語解』『葉わけの風』『表章伊勢日記附証』『皇朝喩林』『公議論』『月舎ぬき穂』『月舎文草』『皇太后宮大夫俊成卿女集』『歌林拾葉集拔萃』『増補和歌分類』『藤原高光集・藤原相如集・源重之集・僧正遍照集・源賢法眼集』『横山由清翁稿本并手沢本目録』『岩倉殿御返翰草稿』『木芽説』『皇国文典序草按』『あつし考等』『橘柑考』『多満波々幾』『天平宝字年間物価表』『忠岑集』『是則集』『忠見集』『敏行集』『清正集』『宗子集』『頼基集』『友則集』『玉のみすまる』『大和琴』『更科乃日記』『語林類葉』『古事部類抄』『類題麗玉集』『古今和歌六帖標注』『続日本紀』『安法法師集』『群書類従』（15冊書入本）『よもの硯拔書』『釈家雑記』が確認できる。このほか、『横山由清雑稿』に含まれて居ないが、横山本の『外宮儀式帳私考』『玉川の水』も『天理図書館稀書目録』第2冊に掲載されている。なお、佐佐木信綱の旧蔵書のうち万葉集に関連するものは、お茶の水図書館に架蔵されており、横山本も含まれていることが予想されるが、今回、時間的な都合で調査することができなかった。

- 14 『古代証図袋之記』『湖月抄別記』『源氏物語麻袋』『続世継』『平家物語備考』『続万葉異本考』『和名抄分音』『雅言集覧』『大宝令問対』『佐渡国金銀吹込図』。大東急記念文庫編刊『大東急記念文庫書目』（1955）旧蔵註記による。なお、川瀬一馬氏は、横山本について「全部一括して佐佐木博士が引き受け、一部分を手もとに残して、大部分は和田雲村の手で久原文庫に入りました。」（『日本における書籍蒐蔵の歴史』ベリかん社、1999）と述べているが、詳細は未詳。なお、和田雲村が収集した本は岩崎文庫（東洋文庫）と久原文庫（大東急記念文庫）に引き継がれたが、和田本のかたわれが残されている東洋文庫では、『日本国善悪現報靈異記攷証』に横山本の印記を確認できる。
- 15 『泊泊筆話』『神明帳考証土代』『滋野親王御祭器考』『阿波国式社略考付式社略考論』『東寺御領莊園斗升増減』『醍醐雜事記』『冠註大和物語』『今昔物語標目探考』『倭字大意抄』『官板扶桑略記』『扶桑略記』『多気具教行状記』『本朝年代人物掌質』『滋野親王御山陵記』『御朱印記 武州八王子領』『丹波国興廢略記』。東京国立博物館編刊『蔵書目録 和書2』（1957）による。
- 16 『南朝編年紀略』『憲法部類』『国号考』『後醍醐天皇年中行事』。宮内庁書陵部編『書陵部蔵書印譜』下（明治書院、1997）357頁による。

- 17 『蜻蛉日記』『和泉式部物語』『嘉喜門院御集』『源頼輔朝臣集』『実万朝臣集』『和歌一字抄』。筑波大学附属図書館編刊『筑波大学和漢貴重書目録』（1996）による。
- 18 国文学研究資料館『国文学研究資料館報』第48号（1997）による。
- 19 当館所蔵『虚詞考』は明治34年に購入している。
- 20 横山本「日本感霊録」について、原口行造氏は、所在不明としながらも、小中村清矩本の奥書を根拠にその存在を推定された（原口行造「「日本感霊録」の基礎的考察-1-研究史・諸本概説及び系統論」、『金沢大学教育学部紀要』人文・社会・教育科学編．26（1978年）所収）。当時所在不明とされていた横山本は、本書のことであろう。

国立国会図書館所蔵横山由清旧蔵書目録

凡例

1. 本目録は国立国会図書館古典籍資料室に所蔵されている横山由清旧蔵書の目録である。
2. 大正4年7月20日に購入され830函に収められた27点の資料と、その後購入されやはり830函に収められた2点の資料を「830函の横山本」としてまとめ、管見の範囲で確認できた、上記以外の4点の資料を「830函以外の横山本」として付した。それぞれ書名の五十音順で排列した。
3. 目録の記述は、書名、編著者名、刊写の別、冊数、大きさ、請求記号、注記、細目、特記事項の順に記した。
4. 書名は太ゴシック体で示した。原則的には『帝国図書館和漢書書名目録』の書名を踏襲したが、一部変更したものもある。複数の書名がある場合は、原則として巻頭から採録し、採録以外の書名は適宜注記に記した。書名の後に、完本の場合は巻数を、端本の場合は存在する巻数を記した。
5. 編著者の役割が「著」のみの場合は、役割を省略した。
6. 出版事項、書写事項は刊写の別に続けて、括弧内に記した。
7. 合冊されている場合は原冊数に続けて「合」と記し、合冊後の冊数を記した。
8. 大きさは縦×横で記した。ミリ単位まで記した。
9. 請求記号は松葉括弧に包み、右寄せで記した。
10. 一般注記は行を替え1字下げとし、別書名、特殊な装丁の情報、印記、購入日等について記した。
11. 内容注記は行を替えて1字下げとして記した。
12. 横山由清及び横山と同時代の人物による書写、校合、入手経緯等に関する奥書・識語はなるべく翻刻した。括弧中に色名を記したものは、その識語、奥書等の記された筆の色である。なお、体裁は必ずしも原本の通りではない。
13. 字体は、現在通行の字体を用いた。
14. 推定は〔 〕で記し、参考の為の補記は（ ）で囲んだ。

※ 編者が気付かないものの「830 函以外の横山本」に相当する資料も残されていると思われます。また、翻刻にあたり誤認等もあるかと思えます。お気づきの方はご一報いただければ、有難く存じます。

830 函の横山本 (830-107 ~ 133、143、169)

阿波郡鑑 写本 1冊 23.3 × 16.5 cm <830-117>

印記「月の屋」. 大正4年7月20日購求

粟の落穂 3巻 野口年長編 写本 3冊 25.7 × 18.2 cm <830-121>

書名は目首による. 序、巻頭書名「粟のおちほ」. 印記「月の屋」. 大正4年7月20日購求

弘化3年12月新居正方序。安政3年8月1日池辺真榛跋。内容は阿波の地誌。

宇津保物語 30巻 刊本 (大坂 秋田屋太兵衛 [ほか] 刊) 30冊 24.8 × 18.6 cm <830-107>

刷題箋「うつほ物語」「宇都本物語」等. 横山由清校本. 印記「月の屋」. 大正4年7月20日購求

細井貞雄本、田中道磨本の校合を横山由清が移写した書入がある。各冊奥書 (一部本奥書も含む) を下記に記す。第1冊「天明元年丑十一月四日五日校合 田中道麻呂 (朱)」、「二年壬寅二月廿七日紺本校合ス」、「右 安政二年六月四日校合 (花押)」(藍)。第2冊「天明元丑十一月六日七日校合 田中道磨 (朱)」、「二年壬寅二月廿八九日晦日マテニ紺本校合ス」、「右安政二六五校合 (花押)」(藍)。さらに、下記の通りあり。

貞雄本奥書

庚午七月廿六日以古写本令校合畢 加朱書者也 ○コ

庚午十二月七日以田中道麻呂校本令一校畢 総而以墨傍書者也○
夕

辛未五月十日以羽倉本令校合畢 加藍書者也 ○ハ

甲戌正月十三日以塙本 古写 令校合畢 加黄書者也 ○土

丁丑四月六日以古写本令一校畢 加墨書片仮字反点畢○ コ

一ハ書中ニなきもの也又死トモカケリ

文久三年十月十六日以紀伊殿古学館御藏細井貞雄自筆校本 小中村清矩借与
対校了 横山由清

第3冊「文久三年十一月朔日以細井貞雄手校本対校了 横山由清（花押）」、「天明元年辛丑年九月十三日浅井図南翁之本ヲ以テ校合同月十七日ニ終ル 田中道麻呂 右安政二年六月十日校合了（花押）」。第4冊「文久三年十月廿五日以細井貞雄自筆校本 古学館御蔵 対校了（花押）」、「天明元辛丑年九月十八日浅井翁ノ本ヲ以テ校合同廿二日畢 田中道麿 右安政二六六校合（花押）」（藍）。第5冊「文久三年十一月四日以細井貞雄校本対校了 月舎主人（花押）」。第6冊「天明元丑九月廿一日図南翁ノ本ヲ以当卷十九丁ルマテヲ校合同廿二日了 田中道丸」（藍）、「当卷十九丁(ママ)ヨリ以下他卷ニミタレ入タルヲ又図南翁ノ本ト考合テ同十一月上旬校合ス」（朱）。第7冊以下は田中道麿本の本奥書はない。第7冊「文久癸亥霜月念一以細井氏手校本対校 月舎主人」。第8冊「文久癸亥霜月念二校合 月舎主人（花押）」。第9冊「文久三年十一月廿四日以細井貞雄手校本対校了 月舎主人横山由清（花押）」。第11冊「文久三年十一月廿五日以細井本一校了 横山由清」。第12冊「文久癸亥霜月念六校（花押）」。第14冊「文久三年十一月廿八日以細井貞雄手校本対校畢 横山由清（花押）」。第15冊「文久癸亥霜月念八校合 月舎主人（花押）」。第17冊「文久三年十二月六日以細井貞雄手校本対校 小野由清（花押）」。第18冊「文久三年十二月七日以細井本校合畢 月舎主人（花押）」。第19冊「文久癸亥極月十二対校 月舎主人（花押）」。第21冊「文久三年十二月十四日以細井貞雄手校本一校畢 月舎主人小野由清（花押）」。第23冊「文久三年十二月十五日以細井貞雄手校本対校畢 横山由清（花押）」。第26冊「文久三年十二月十七日以細井貞雄手校本対校了 月舎主人（花押）」。第28冊「文久癸亥臘月十八以細井本対校卒業（花押）」。第10、13、16、20、22、24、25、27、29冊には奥書はない。第30冊末に一葉を加え、下記奥書を記す。

うつほ物語全部与板の殿の新奥香風軒の御まへの御蔵本を申おろして校合し畢ぬ、此本巻のついて十六巻并の巻三巻また一巻を二巻に分たるなとありてすへて二十巻、筆者はたしかならぬとおほよそ三百年あまりの古写本にて胡蝶装表紙のさまなといと古代也、もと生実の殿の御蔵なりしを此御前の此殿におはします時もたせ給へりしなりとぞ、巻々のついて次下にするす

安政元年甲寅十一月廿三日 此日改元

月舎のあるし横山由清（花押）

校合以朱傍書ヨ字ヲ標ス

卷ノ次

卷一 としかけ 卷二 藤原の君 卷三 た、こそ
 三ノ并卷 春日詣 卷四 さかの院今藏(下) 四ノ并卷 祭の使
 卷五 ふきあげ上 同 吹上下 五ノ并卷 菊の宴
 卷六 あてミヤ 卷七 はつ秋 卷八 おきつしら浪
 卷九 蔵ひらき上 卷十 蔵ひらき中 卷十一 蔵ひらき下
 卷十二 国ゆつり上 卷十三 国譲中 卷十四 国ゆつり下
 卷十五 ろうのうえ上 卷十六 楼のうへ下 已上二十卷
 文久三年十二月十九日以細井貞雄手校本全部対校卒業 小野由清

〔細井本奥書

文化七年庚午九月二日友人某所蔵以古写本令校合畢不抃好悪悉以朱傍書者也 源阿曾美 (花押)

文化八年辛未四月廿二日以田中道麻呂校本令一校畢朱書与彼本之同事者不記之 委加墨書者也 (花押)

文化十年癸酉九月十一日以檢校保己一所持古写本令校合畢前校与同者不記焉 加黄書者也

文化十二年乙亥九月十七日以荷田在満校本令一校畢与前校同者不記焉 加藍書者也

校合符号 コ 古写本 タ 田中本 土 塙本 ハ 羽倉本

此他細井校本中ニ墨ニテ (明) ト記シタル所アリ。又頭書ニ明阿曰云々ト記シタル所アリ。山岡明阿ノ本ナルヘシ

山岡明阿本奥書

天明元年仲夏旬校合畢 庚月堂蔵

天明二年壬寅五月十五日 藤原忠寄

寛政元年春より山岡明阿翁頭書加へたる書片山足水蔵する故乞て時同二年庚戌十月書写

以上細井本を転写した旨の奥書には細井の本奥書 (細井が校合した日を記したものが、各冊に記されているが、煩瑣を避け略した。

第12冊に屋代弘賢の考証を写す。第19冊巻末刊記「延宝五^丁年初春吉辰開板 三都発行書林 大阪心齋橋通北二丁目秋田屋太右衛門 (ほか九軒)」とあり。また、奥付前丁に、

「^{補刻}文化三年丙寅春三月吉旦
書林」

と刷られ、「書林」に続けて「大坂本町四丁目葛城宣英堂奈良屋長兵

- 衛板」と書入れ、さらに「カクアル本モアリ此本ハ書賈ノ名ヲケツリタルナルヘシ 当時秋田屋ノ蔵版ニヤ」と記している。
- 亀府墜誌** 写本 1冊 26.7 × 19.1 cm <830-118>
 印記「月の屋」. 大正4年7月20日購求
 亀山の地誌。
- 行刑并囚獄図** 写本 (明治写) 2冊 26.6 × 18.6 cm <830-127>
 書名は『帝国図書館和漢図書書名目録』による. 薄葉紙使用. 印記「月の屋」大正4年7月20日購求
 内容: 1: 大宝篇序論, 大宝律図, 北条篇序論, 北条律図, 徳川篇序論, 徳川律図, 明治篇序論^(ママ), 明治律図, 行刑之図
 帝国図書館で付した表紙上の書題箋は「行刑并内獄図」とあるが, 誤記と考え、『帝国図書館和漢図書書名目録』に従った。
- 居所名目記** 写本 (明治写) 1冊 24.4 × 17.3cm <830-115>
 書題箋「居所名目」. 巻頭「居所部」. 大正4年7月20日購求
 居所、住所に関する用語例を集めたもの。「大学」黒10行罫紙使用部分あり。頭注を付す。元表紙に「横山」と貼紙あり。
- 公事根源集釈** 3巻 松下見林 刊本 (京都 村上勘兵衛 元禄7年刊) 3冊 26.2 × 19.3 cm <830-128>
 書名は刷題箋による. 巻頭は「公事根源」. 印記「由清之印」「月の屋」. 大正4年7月20日購求
 上中巻に校合註あり。全編に付箋を付す。巻末に書林野田藤八の蔵版目録を付す。
- 古器紋図** 写本 1冊 18.5 × 12.2 cm <830-112>
 大正4年7月20日購求
 古器物の模様や形態を書写したもの。紙片を貼込んだものも多い。
- 古物語名寄類韻** 横山由清 写本 (自筆稿本) 1冊 23.5 × 16.6 cm <830-113>
 印記「月の屋」. 大正4年7月20日購求
 内容: 古物語名寄類韻 (付: 石清水物語系図). (画図名寄類韻)
 「古物語名寄類韻」奥書「嘉永七とせ神嘗月望の夜ともし火のもとに類聚し畢ぬ 横山由清」。朱書「黒河春村著古物語類字抄三巻アリ一覽ノ次校合ス」とあり。
- 猿楽図** 写本 1冊 26.5 × 18.4 cm <830-125>
 薄葉紙使用. 補あり. 印記「高橋蔵書」「月の屋」. 大正4年7月20日購求

悉曇三密鈔 3巻 浄厳 刊本（経士庄左衛門 天和2刊） 8冊 27.3 × 19.7 cm <830-133>

書名は序首による。各巻頭の「悉曇」字は梵字表記。書外題「三密鈔」「三密抄」。印記「月の屋」ほか。大正4年7月20日購求

序1冊、上2冊（本・末）、中2冊（本・末）、下3冊（上・中・下）から成る。定心等校合本。定心等奥書あり。

志乃比祢物語 2巻 写本（嘉永3年 横山由清写） 2冊 25.9 × 18.2cm <830-108>

元表紙「忍音ものかたり」「しのひ音物語」。帝国図書館表紙「忍音物語」。横山由清自筆写本、同校合本。印記「月舎」「月の屋」。大正4年7月20日購求

上巻巻頭に朱筆識語「丹 丹雀叢書本」「イ 丹本ニ校合セル一本」。下巻末本奥書「一本奥書云 文政五壬子十一月以等光寺藏本写之」、奥書「嘉永三年三月廿二日書写卒業 横山由清」、「同月廿九日校合之次注付愚意了^印^印^印」、「同七年八月十二日以丹雀叢書之本校合終功（花押）」（朱）。

習静日抄 6巻 横山由清 写本（自筆稿本） 6冊 23.8 × 16.6 cm

印記「月の屋」。大正4年7月20日購求 <830-114>

巻頭「養徳琴」。付：神楽催馬楽時代考／〔黒河〕春村。漢様御諡号（黒河春村「碩鼠隨筆」13巻書抜）。桓武天皇御母后和氏皇大夫人高野新笠。弥勒脇士弁

内容：1：阿行。2：加行。3：左行。4 多行、奈行。5：波行、麻行
6：也行、良行、和行

言葉と字の用例を集めたもの。青11行罫紙、「耕雲堂」10行黒罫紙、「雅語便覧」10行黒罫紙、「月舎梓」10行黒罫紙をとりまぜて使用。第六巻末に「神楽催馬楽時代考」等を付す。

食貨志略 3巻〔横山由清〕 写本（明治写） 3冊合1冊 26.8 × 19.0 cm

印記「月の屋」。大正4年7月20日購求 <830-129>

「元老院」10行橙罫紙使用。第3巻巻頭に「此図二巻ハスヘテ小中村清矩ノ補入スル所也」とあり。第3巻末に「野田」印あり。

続日本後紀 20巻 藤原良房・藤原良相・伴善男・春澄善繩・県犬養貞守編
山崎知雄・横山由清校 写本 10冊合5冊 26.5 × 18.0 cm <830-122>

印記「由清之印」「月の屋」。大正4年7月20日購求

横山由清自筆校合本。立野春節寛文8年跋、同明暦4年跋、山崎知

雄安政4年凡例、村尾元矩安政6年跋あり。奥書「安政四年歳次丁巳後五月十三日書写卒業 山崎知雄 時年六十一」、「慶応三年正月廿九日一校了 愚意用朱 横山由清」。卷二末奥書「対校高橋広道」。

諸国名勝志 4巻 斎藤是一 写本 4冊 23.4 × 17.0 cm <830-116>

印記「月の屋」, 大正4年7月20日購求

書名は書題箋による。頭注あり

自序末には「文化十あまりひと、せ九月 草の屋是一」とあり。

新撰姓氏録 3巻 万多親王 刊本(浪華 加賀屋善蔵 文化9年) 3冊 25.4 × 17.7 cm <830-131>

校合本。伴信友書入移写。印記「月の屋」「由清之印」「桜戸文庫」。大正4年7月20日購求

朱筆、藍筆の書入、貼紙等多数あり。第3巻末に伴信友による本奥書あり。序文に小山田与清の按語あり。

新喪類記 横山由清 写本(自筆稿本) 1冊 26.8 × 18.7 cm <830-126>

印記「月の屋」

付：改葬式

奥書「右新葬類記一卷与古川与一久米文市蜷川式胤等合議製之堅固草案也宜憚他見 明治四年辛未正月 横山由清(花押)。「改葬式」奥書「右明治五壬申三月六日追補 依深川亮蔵之請 横山由清」。

続化蝶類苑 宇野宗明 写本 1冊 27.0 × 18.0 cm <830-124>

荒木方斌書写本。題箋角書「評閲註校」。書名尾書「挹翠裡臬々堂蔵書」。印記「月の屋」「荒木家蔵」「通正堂」ほか。大正4年7月20日購求

古銭の解説書。宇野宗明安永2年凡例。荒木方斌寛政8年序、同寛政9年跋を付す。

多幸日記 瀬清陳人(本間游清) 写本 3冊合1冊 22.4 × 16.2cm

<830-111>

文政12年成立。印記「月の屋」ほか。大正4年7月20日購求

『帝国図書館和漢図書書名目録』に「横山桂子写」とあり。

露の朝顔 5巻 横山桂子 写本 5冊 24.7 × 16.5 cm <830-109>

書名は第1冊書名による。稿本。印記「月の屋」。大正4年7月20日購求

内容：第1冊：露の朝顔。第2冊：旅路の花。第3冊：蕙の紫風。第4冊：在明の月。第5冊：東のつれ(文政12年。書外題による。巻頭および巻末は「あつまのつれ」)

旅日記。抹消、押紙、胡粉による訂正あり。

八王子名勝志 4巻 百枝翁 写本 4冊 27.6 × 18.5 cm <830-120>
稿本。絵入。表紙朱書「蠹巢好古珍収之圃」。印記「月の屋」。大正4年7月20日購求

朱筆、押紙による訂正多数あり。

はつ春の日記〔横山〕桂子 写本 5冊合2冊 23.9 × 16.5cm <830-143>

書名は第1冊巻頭による。巻頭題箋等：「初はるのにき」「はつ春のにき」「初春のにき」「始春の日記」等。第1冊表紙裏裳「横山由清自筆」。印記「雀」。大正6年3月31日購求

内容：1：甲辰。2：乙巳上。3：乙巳下。丙午。4：丁未。戊申。己酉。5：辛亥。壬子

『帝国図書館和漢図書書名目録』に「横山由清自筆」とあり。各年正月元日より10日から20日程度の間記された歌日記。第1冊「甲辰」は、天保15年、第5冊「壬子」は嘉永5年。一部欠ける部分があり、8年分。

播磨風土記 写本（横山由清写）1冊 27.2 × 18.5 cm <830-119>
印記「月の屋」。大正4年7月20日購求

内容：播磨風土記（付：播磨風土記逸文）。丹後国風土記（付：与謝郡逸文・丹波郡逸文。丹後風土記訂正総括）。日本感靈録（付：〔東大寺要録卷四抜抄〕）。新抄格勅符。神依板

「播磨風土記」奥書寛政8年藤紀光の奥書のほか「嘉永五年九月六日書写了 平種築」、「同六年十一月廿八日書写校合了 中臣連胤（朱）、「安政三年三月中旬借得京師鈴鹿筑前守所蔵本謄写畢 藤原春村」、「文久元年十一月廿二日以黒川春村蔵本謄写了 小野由清」とあり。また、「播磨風土記逸文」奥書「文久紀元冬至後二日一校了 横山由清（花押）」。

「丹後国風土記」奥書は長享3年智海、慶長13年素然、宝永6年菅原長近のもの及び「安政二乙卯年八月晦日書写一校了 連胤（朱）、「文久二年十一月廿八日以鈴木真香本書写了 横山由清（花押）」。「与謝郡逸文・丹波郡逸文」部分奥書「懇請然中臣連胤朝臣之蔵本^(ママ)謄写之蓋此書雖為僅々一少殘闕頗有正実之旧辞存実可謂国家宝典耳、故校訂補正以伝後昆焉 安政三年八月十日六人部是香（花押）」。「丹後風土記訂正総括」部分奥書「文久三年正月五日以六人部是香訂正本^{黒川春村蔵}校合

月舎主人（花押）」とあり。

「日本感靈録」には久安3年の奥書。また、本文奥書「右感靈録鈔本墨付十四葉長沢伴雄以或秘藏本所摸写也、今懇請写畢原書朽損可惜天保六^{乙未}年八月二十七日 伴信友」、「天保十四年歲次癸卯臘月以伴信友所藏本令贍写了 椎本春村（花押）^(宋)同十五年孟春以温古堂本比較之」、「水府本奥書云右日本感應録一卷以梅尾高山寺本写之 文久元年八月二日比較了（花押）」、「〔東大寺要録卷四抜抄〕」後奥書「右日本感靈録鈔本殘欠一卷以黒河春村所藏本贍写卒業 文久元年十一月朔 横山由清」、「同年冬至前一日一校了」（代赅）とあり。「水府本・・・」の「梅尾高山寺」の脇に「京師乙丑本」と記される。

「新抄格勅符」には長保3年の小槻奉親、ほか奥書「以醍醐寺報恩院所藏古本写之 此文佐々宗淳手書也」、「右新抄格勅符一冊就彰考館本写之時万延紀元之冬十二月晦 栗田寛」、「右一卷以小中村清矩氏本贍写文久元年十月 木村正辞」、「文久元年十一月以木村正辞所藏本令贍写了 横山由清^(宋)同月十五日一校了」とあり。「神依板」は宝亀2年奥書あり。

扶桑略記校譌 狩谷望之 写本 1冊 26.0 × 17.8 cm <830-123>
無書入。印記「月の屋」。大正4年7月20日購求
文章会 横山由清編 写本（自筆稿本）1冊 23.5 × 16.4 cm <830-110>
印記「月の屋」。大正4年7月20日購求

安政6年9月22日の井上文雄社中の文章会記録。内表紙上書に下記
の通りあり。

安政六とせ長月廿二日

文章会兼題 於柯堂

暮秋擣衣

同当座

恋消息合 寄紅葉

兼題・当座併せて、由清、^(横山)文雄、^(井上)永好、^(間宮)八十子、^(久米)清風、^(深見)資治、草野子、清鶯、みまき、千浪、さたむる子、千浪、御牧、直恒、（山崎）知雄の文章がみえる。前後に「古寺落葉といふことを題にす」（井上文雄、横山由清、間宮永好、さたむる子、深見草野子による）、「長歌を辞する文」（井上文雄による）あり。さらに、巻頭に「〔住吉のきし辺のあしニ・・・〕」、「納涼といへる題にて」、「また」、「〔我大御国にて詩といふものを始めて学ひ作らせ給ひし・・・〕」（横山由清、明治8年5月）、「烽の野に遊ぶ辞」

を綴じ込む。巻末には 17 種の和文（下河辺長流、安田躬弦、井上文雄、間宮永好、久米八十子、河野三貫、正木千幹、山川真清、清水光房、深見草野子、山田常典、瀬戸久敬によるもの。青 11 行罫紙及び「柯堂」10 行罫紙使用）を合綴する。

万葉一句類語〔藤田武鞆〕写本 2 冊 25.3 × 17.8 cm <830-132>

印記「月の屋」。大正 4 年 7 月 20 日購求

令義解 10 巻 清原夏野 塙保己一校 刊本（江戸 山城屋佐兵衛 寛政 12 年刊） 10 冊 25.8 × 18.0 cm <830-130>

横山由清校本。温故堂蔵版。印記「月の屋」「敬義館文庫記」。大正 4 年 7 月 20 日購求

群書類従本。「右令義解十巻以紅葉山 御文庫古本水戸殿校本松浦家 岩城家及稲葉通邦蔵本校正之畢 寛政十二年十二月 日 檢校保己一」と奥書印刷。朱、墨、藍の書入多数あり。

倭名類聚抄 20 巻 源順 刊本（大坂 渋川清右衛門 寛文 7 年刊） 5 冊 26.7 × 19.4cm 印記「由清之印」ほか。大正 9 年 5 月 11 日購求

<830-169>

対校本。本文に墨、朱、藍、代赭の筆で校合註あり。巻 2 末欄外に「已上以大須本校了 嘉永三十五了」（朱）「泊本既校了 同五四廿七日」（朱）「大須宝生院本再校（青）」。第 1 冊（巻 4）奥書に「嘉永七年九月清水浜臣校本、校本其外写手拙劣誤脱不少可取捨也 △標是也正份」（代赭）、「安政五年九月十九日以松屋小山田与清校合本一校了（花押） 間宮永好伊能頼則等之説及び今按等注付し候」（藍）、「安政五年九月廿三日再校了 由清」（青）、「永好蔵本 嘉永元年二月以師翁校本校合了 松屋間宮永好（花押）」（青）、欄外に「活本一校了 五月朔日再了 捨芥一校了 頗不同」（朱）とあり。第 2 冊（巻 8）奥書「嘉永改元四月二十有九日以故松屋先生自筆校釘本書入了 松屋主人間宮永好」（墨）、「浜臣校本一校了 嘉永七年九月廿三日」（代赭）、「職官并件国郡郷名以活字本一校了 嘉永五年四月二日（花押）」（朱）、巻末欄外に「安政六年三月廿二日小山田与清校本校合卒業 由清 同月廿七日再校了」（墨）とあり。第 3 冊（巻 12）奥書「以浜臣校本一過了 嘉永七年九月廿四日辰三点」（代赭）、「嘉永元年十一月以師家校本一校了 間宮永好」（墨）、「安政六年十月一日校了 横山由清」（墨）とあり。第 4 冊（巻 16）奥書「嘉永二己酉年正月以師家蔵本校合了 松屋主人永好」（墨）、「安政七年三月廿四日以小山田与清校合本校合卒業

横山由清 同廿六日再校了」とあり。卷末欄外に「以浜臣校本一過了嘉永七年九月廿四日」(代緒)とあり。第5冊(卷20)奥書は下記の通り。

嘉永四年九月与^(ママ)省本一校了(花押)(朱)

同 五年五月津山府蔵活字本一校了 尔時五月五日 源正彬(朱)
安政三年仲夏得山川正份蔵奔校合本再校之次加僻案了 横山由清(花押)

浜臣本云文化十二年九月念二聊注所見 泊酒舎主人

嘉永七年九月件本をもて校之 原書ならねは伝写の拙劣甚しと急速の間不得委細復善本者也

安永二年癸巳十二月十二日以活板本校合之附異是也

同八年己亥十二月十日以古写本再校合了 本居宣長(花押)

文化四祀丁卯仲夏得一写本并田中本孝校本以朱墨校合了

同九年七月再加僻案一校了 高田与清(花押)

天文本奥書

一之卷 天文丙午天詔全宗書之

二之卷 詔全宗書之 天文丙午天

三之卷 詔仲東靖書之 天文丙午天

四之卷 詔奔俊書之 天文丙午天

五之卷 詔伊舜上人書之 天文丙午天

嘉永六年九月以小山田先生蔵本校正了 間宮永好(花押)

万延紀元夏四月以小山田与清手稿本并間宮永好校合本校正了 横山由清

830 函以外の横山本

栄花物語の歌 写本 1冊 22.7 × 15.8 cm <126-282>

印記「月の屋」. 大正8年12月9日購求

虚詞考 刊本(浪華 小川屋六蔵[ほか] 寛政元年刊) 22.8 × 16.0cm <188-421>

摺題箋書名「和哥虚詞考」. 補訂書入本. 印記「月の屋」ほか. 明治34年3月3日購求

甲組類函〔春田〕永年編 写本 1冊 27.2 × 19.0 cm <848-166>

印記「月の屋」. 昭和15年3月28日購求

表紙裏に「了阿自筆本」と覚あり。寛政9年住吉広行序。甲冑の威の考証書。

庶物類纂竹属〔稻生宣義・丹羽貞機〕写本 1冊 23.7 × 16.5 cm

〈特1-2002〉

白井文庫本。印記「於保波多」「月の屋」「白井光」。昭和16年9月24日購入

(おおぬま よしき 人文課)